

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成28年5月20日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 工学研究科

職名 教授

氏名 吉田潤一

助成の種類	平成28年度・研究成果公開支援・国際会議開催助成		
事業内容	第12回国際有機反応化学シンポジウムおよび第6回日独有機電解合成シンポジウム		
開催期間	平成28年4月22日～平成28年4月24日		
開催場所	京都テルサ		
参加者	総数 176名	内訳 日本:105名、台湾:55名、ドイツ:6名、タイ:4名、 米国:3名、中国・トルコ・英国:各1名	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(講演要旨集)		
会計報告	事業に要した経費総額	5,660,518 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	科学研究費補助金:基盤研究(S)・新学術領域研究「中分子戦略」、井上科学振興財団助成金、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団助成金、水谷糖質学振興財団助成金、参加費、懇親会費	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費目	金額(円)	財団助成充当額(円)
	旅費交通費	1,872,118	815,720
	会場費・会場関連費	1,787,694	184,280
	印刷製本費	176,040	
	通信費・雑費	9,617	
	謝金	394,500	
消耗品費	101,789		
懇親会・会議費	1,318,760		
合計	5,660,518	1,000,000	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 事業の実施が年度初頭であり、助成決定から十分な時間がない中で、助成金使途の一部変更を申請しましたが、迅速かつ柔軟にご対応いただき大変助かりました。貴財団のご支援に改めて感謝いたします。		

成 果 の 概 要

京都大学大学院工学研究科 吉田 潤一

平成 28 年 4 月 22 日～24 日、京都テルサにおいて、「第 12 回国際有機反応化学シンポジウム (ISOR-12) および第 6 回日独有機電解合成シンポジウム (GJSE-6)」を開催した。国際有機反応化学シンポジウム (International Symposium on Organic Reactions, ISOR) は 1988 年より日本と台湾の都市において 2～3 年ごとに開催されてきた有機化学分野の国際会議であり、今回で 12 回目、29 年目にあたる。参加者数は、176 名 (日本：105 名、台湾：55 名、ドイツ：6 名、タイ：4 名、米国：3 名、中国・トルコ・英国：各 1 名) であった。日独有機電解合成シンポジウム (German-Japanese Symposium on Electrosynthesis, GJSE) は、2010 年より日本・ドイツにおいて開催されてきた有機電解合成分野の国際会議であり、今回で 6 回目、7 年目にあたる。今回、日本、ドイツ、米国、中国、台湾から約 50 名の研究者が参加した。ISOR と GJSE は別々の大会であるが、今年は開催地・時期が重なったため、双方の研究分野の研究者の交流、研究の新しい展開を期待し、ジョイントシンポジウムとして開催した。

4 月 22 日から 24 日の午前に開催された ISOR-12 では、2 件の Plenary Lecture (日本 1 件、台湾 1 件)、9 件の Keynote Lecture (日本 2 件、台湾 2 件、欧米 5 件)、27 件の Invited Lecture (日本 17 件、台湾 10 件)、40 件の Short Invited Lecture (日本 25 件、台湾 15 件)、合計 78 件の口頭発表が 2 つの会場で行われた。また、ポスターセッションでは、国内外の学生 52 名を含む 72 件のポスター発表が行われた。本シンポジウムは有機化学の幅広い分野をカバーしており、有機電子移動化学、新反応開発、有機金属化学、不斉合成、生物有機化学、医薬品化学、天然物化学、材料化学など、各分野の最新の研究成果の発表・討論が行われた。様々な専門分野の研究者が参加していたことから、様々な視点から活発な質疑応答が行われ、発表時間を大きく延長して議論が行われた。特に、Plenary Lecture では、国立清華大学 (台湾) の Chien-Hong Cheng 教授が「Cobalt Catalyzed Organic Reactions」について、東京工業大学の鈴木啓介教授が「Lessons from Total Synthesis of Hybrid Natural Products」について、非常に優れた研究を発表された。また、本シンポジウムでは、若手研究者の育成も目的としていたことから、40 件の Short Invited Lecture の大多数を 30～40 代前半の新進気鋭の若手研究者が行った。優れた研究発表が多く行われており、今後の活躍が大いに期待される。また、優れたポスター発表を行った 6 名の学生 (台湾：2、ドイツ：1、タイ：1、日本：2) を Poster Award として表彰した。優れたポスター発表が多かった中で、受賞したポスター発表は研究の面白さがよく伝えられていたように思う。

2 日半に渡って行われた ISOR-12 では、台湾と日本の研究者を中心に、Keynote Lecture を行った欧米の 5 名の研究者とも、活発な意見交換を行い、研究の新しい展開を着想したり、親睦を深めたりすることができた。ISOR は約 30 年続いており、研究者間の距離は非常に近くなっている。今後も各研究者が優れた研究を行い、また共同研究を行うことにより、本研究分野がさらに発展することを期待する。なお、次回の ISOR は 2018 年 11 月に台湾、新竹市で、Wen-Sheng Chung 教授を議長として開催される。多数の研究者の参加を期待したい。

4 月 24 日の午後に開催された GJSE-6 では、10 件の口頭発表が行われ、有機電解合成を中

心とする有機電子移動化学に立脚した反応開発や材料開発について、最新の研究成果の発表・討論が行われた。発表の8件はドイツと日本の学生の講演であり、著名な研究者の前で英語で口頭発表をする良い経験になったと思われる。今回の発表を糧として、大きく成長して欲しい。また、Special Lecture として、東京工業大学の淵上寿雄名誉教授が「Recent Development and Future Perspective of Organic Electrochemistry」について、講演された。有機電解の将来について、新しい展開を思いついた研究者も多かったのではないかとと思われる。

GJSE-6 は半日という短い期間であったが、すべての研究者が一つの会場に集まり、ドイツと日本の研究者を中心に活発な意見交換や親睦を深めることができた。アメリカや中国の研究者も参加しており、今後、本シンポジウムがドイツと日本以外にも広がることを期待する。なお、次回の GJSE は2017年9月にドイツ、マインツ市で、Siegfried R. Waldvogel 教授と Gerhard Hilt 教授を議長として開催される。多数の研究者の参加を期待したい。

最後に、本シンポジウムの開催にあたり、京都大学教育研究振興財団からの助成に、深く感謝申し上げます。ISOR、GJSE とともに母体となる正式な組織がないため、会議開催の資金の確保に苦労したが、本財団の助成により、海外からの参加者の参加費を安価に設定することができ、数多くの研究者が参加し、盛況に開催することができた。本シンポジウムの成功を次回以降に繋げられるように、研究に精力的に取り組みたい。



Chien-Hong Cheng 教授による Plenary Lecture (ISOR)



活発な質疑応答が行われた (ISOR)



ポスター賞受賞者と組織委員長による記念撮影 (ISOR)



白熱した議論の様子 (GJSE)